が、實はこの廣場一面に間配られた卓と椅子とを占領する丈けの事で、勿論頭の上は星の閃めく青空である。食ひ物の中で著しく變つて居るのは、青い唐辛子の料理と、玉蜀黍を形の儘で炙つたのをぼり〳〵かじることだ。ちよつと日本の夏を思ひ出させる。

食い惡い玉蜀黍を興に乘つて、かうして喰ふのだ、かうしてだなどゝ、Tさん――此の人もまだ玉蜀黍の喰ひ方を心得て居る程のハンガリー通ではなく、實は僅一月ばかり前にこゝに來た人で、それでも當地在留の唯一の日本人として、日本の國民を代表して居る如く見られて居る人だ――とはしやいで居る內に、卓を一つ隔てゝ筋向ひに居つた二人の老婦人と話し合ふことになつた。先程から頻に自分等を見ては何かヒソ〳〵話をして居た、此の婦人達の一人が、一寸相圖をして、フォークの先に、三つばかりに切つた玉蜀黍の一片を突き刺して、小器用に口に當てゝ其の幾粒かづゝを喰ひ取つて見せる。それ位の事は何でもないから眞似をして食つて見せた拍子に相手を見ると、低いながらも手を叩いて喝采する。Tさんが一かど馴れた調子でビールのコップをさし擧げると、向ふは擧げる杯の無いので大にまごつく。Tさんが別のコップを持つて來さして麾くと、二人は自分等の卓に來て快く飲む。

聞いて見ると姉妹で、妹は夫と共にミュンヘンに住んで居るのであるが、其の夫が日本に行つたことがあるので、寫眞などで自然日本を知り、自分等を一見して日本人と見定めたと大自慢である。こんな事が自慢話になる程日本とは緣の遠い地方に入り込んで來て居ることを考へると、急に旅の身の寂しさが襲つて來る。唐辛子は土地の人は好んで喰ふが、獨逸人に喰はすと死んでしまふとか、氣狂になるとか、姉の婦人は話して聞かせた。そんな話を聞き乍ら暑さ凌ぎに好い氣になつてビールの杯を重ねて居る內に、俄に胸が苦しく、立ちぐらみのするのを覺え